

2023年12月7日～8日 トラベル懇話会 国内研修旅行

福島第一原子力発電内部視察と福島県浜通り復興の軌跡をたどる2日間

福島県いわきの見事な青空と可愛いバスガイドさんの出迎いで、私たち一行18名のトラベル懇話会の視察研修旅行はスタートした。ツアーの副題にもあるように、大きな目的は福島第一原子力発電所内部を見学することにある。

バスの中で配られた福島の名産物が入ったお弁当を食べながら、日程表を見直して、少し観光気分だった自分を反省した。言うまでもないが、福島第一原子力発電所といえば2011年3月11日に起きた東日本大震災を起因とする、1986年4月におきたチェルノブイリ原子力発電所事故以来、最も深刻な原子力事故が起きた場所なのだ

バスで浜通りを北上し、東京電力廃炉資料館に到着。お洒落な建物は事故前は原子力PR館として利用されていたという。何となく複雑な気持ちになる。館内にて東京電力ホールディングス(株)福島復興本社副代表の田村光氏や、スタッフの方からレクチャーを受ける。冒頭は多大な迷惑をおかけしたというお詫びから始まり、事故の原因、現在の状況を聞く。処理水の話が多かったのは今年の8月24日から始まった処理水の放水を意識しての事だろう。話の中に『反省と教訓』『おごりと過信 天災と受け止めてはいけない』という言葉があり企業としての責任を感じとれた。

その後は、東京電力のバスに乗り、何度かのチェックを受け。首から線量計をかけて、東京ドームの72個分の広さがある発電所内部へ。コンクリートの壁とビニールでおおわれたがれき、什器やタンクなどの無機質な風景。おそらく事故前から植わっていたと思われる桜の木々をみて少し心が和んだ。誤解を恐れず言うなら、まるで映画のセットのように見えた。その気持ちが一変したのは、ブルーデッキといわれる1号機から4号機まで見渡せる場所で下車した時だ。バス内の線量計の数値はかなりあがっているのも気になった。バスを降りると目の前には太平洋の海原、こんなに海が近い。そして、大きな建物が1号機から4号機まで。すでにカバーがかけられ、当時の姿は想像もつかない建屋もあるが、これらが爆発したことがどんなにたいへんだったか、十分に想像できた。廃炉作業は着実にすすめられているとのことだが、まだまだ時間がかかることは間違いない。

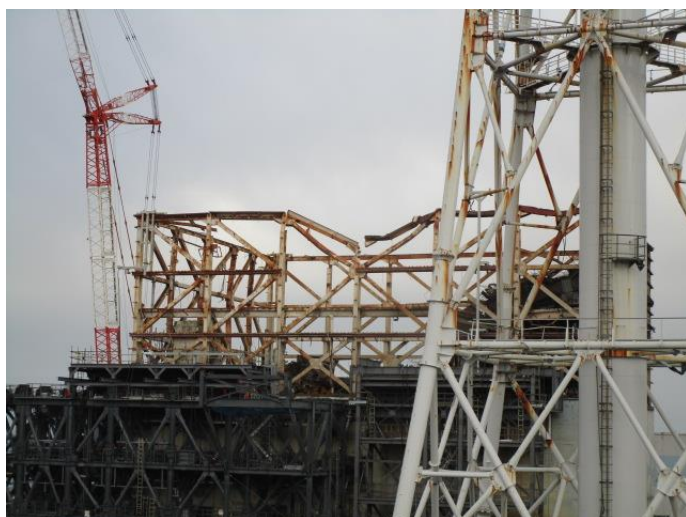
見学を終えると、宿泊先のJヴィレッジへ。ここでも震災後のお話をうかがう。翌日は東日本大震災と津波に伴う原子力災害を後世に伝えることを目的としている東日本大震災・原子力災害伝承館、震災時生徒全員が無事避難することができた奇跡の学校としても知られる請戸小学校など福島県双葉町の震災関係の見学はつづいた。

東日本大震災から11年の時を経て、震災のことが少しづつ私たちの心の中から消えかけているのは事実だと思う。現地に行けば新しい住宅が立ち並び、復興しているようにも見えるが、地震、津波、原子力、風評といった被害を受けた被災者の様々の思い、100人いれば100の、1000人いれば1000の思いがあり、それは生涯消えることはないのだろう。

私たち観光に携わるものにとって、日本人としていや、一人の人間として何ができるだろうと思いながら福島を後にした。まだ 答えはみつからない。改めて、多くの考える機会があった研修旅行だった。

ご手配いただいた阪急交通社の皆様、企画して下さった行事研修委員会の皆さまにお礼申し上げます。

(文：戸井川裕美子)



福島第一原子力発電所 1号機



福島第一原子力発電所 ブルーデッキにて



東日本大震災・原子力災害伝承館